

当代外语
研究论丛
FOREIGN
LANGUAGES
STUDIES
语言学研究系列

(日文版)
日本现代文学研究

李先瑞◎著



日本现代文学研究

 上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS



浙江越秀外国语学院校级科研启动项目

日本现代文学研究 (日文版)

李先瑞◎著



日本现代文学研究



上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

内容提要

本书为“当代外语研究论丛”系列之一。本书沿着历史发展的脉络,就战后日本的主要作家的重要作品进行分析解读,包括大江健三郎、开高健、井上靖、仓桥由美子、河野多惠子、大庭美奈子等作家的作品,突出原典解读和文本分析。本书不是文学史,而是文学研究。本书读者对象主要是日语专业的教师和学生,以及有一定日文水平的对日本文学感兴趣的读者。

图书在版编目(CIP)数据

日本现代文学研究:日文版 / 李先瑞著. —上海:上海交通大学出版社,2018

ISBN 978-7-313-18856-4

I. ①日… II. ①李… III. ①日本文学-现代文学-文学研究-日文 IV. ①I313.065

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2018)第 013512 号

日本现代文学研究(日文版)

著 者: 李先瑞

出版发行: 上海交通大学出版社

邮政编码: 200030

出版人: 谈毅

印刷: 当纳利(上海)信息技术有限公司

开 本: 710mm×1000mm 1/16

字 数: 252 千字

版 次: 2018 年 1 月第 1 版

书 号: ISBN 978-7-313-18856-4/I

定 价: 82.00 元

地 址: 上海市番禺路 951 号

电 话: 021-64071208

经 销: 全国新华书店

印 张: 13

印 次: 2018 年 1 月第 1 次印刷

版权所有 侵权必究

告 读 者: 如发现本书有印装质量问题请与印刷厂质量科联系

联系电话: 021-31011198

序 文

諸君の目の前に置かれているのは日本の現代文学を研究する著書である。主に1945年から1995年までの日本文学を研究内容とする。内容は日本の民主主義文学、無頼派文学、第一次・第二次「戦後派」文学、「第三の新人」文学、高度成長期の文学、戦後女性文学及び村上春樹、村上龍の文学などを含む。扱っている作家は佐多稲子、平林たい子、壺井栄、宮本百合子、石川淳、伊藤整、太宰治、坂口安吾、梅崎春生、椎名麟三、武田泰淳、野間宏、大岡昇平、三島由紀夫、安部公房、安岡章太郎、吉行淳之介、大江健三郎、開高健、井上靖、倉橋由美子、河野多恵子、大庭美奈子、津島佑子、有吉佐和子、吉本ばなな、村上春樹、村上龍など30人ぐらいである。これらの作家はほとんど現代文学の大家であり、中では、宮本百合子、野間宏、大岡昇平、三島由紀夫、大江健三郎、井上靖、津島佑子、村上春樹などは巨匠級の文学家である。この著作は歴史の脈に沿って、1945年以降の代表作家の代表作品について多く論じ、日本文学を研究する教師や日本文学に興味を持つ者のために参考になるだろうと信じる。

今、中国では、一般の教材としての「日本文学」は学部生用の教材がもうたくさん出版されているが、原著の抄録が大部分の紙幅を占め、作者の紹介、注釈と思考問題がついているのは共通点だと言えよう。しかし、この一冊は違う。書名通りに日本の現代文学の研究である。原文の抄録は一篇もなく、評論と研究で一貫している。だからこそ研究書である。

文学史の視角からいうと、現代文学は一断代史である。もちろん、今の日本文学史の分け方によっては、昭和初年から昭和20年までの文学も現代文学の一部分であるが、何故1945年から1995年までの文学を研究対象にしたのか、著者の李先瑞の話によると、原因は次のとおりである。日本文学史は古代から、近代まで研究書も、教材も豊富多彩に刊行されている。現代文学(特に戦後文学)は時代感が近いせいか、作品が少ないせいか、それについてのものは割合に少ないようである。日本の現代女性文学に至っては、研究者や研究書は近代文学に比べれば、その数はもっと少ない。以上のことを考えて1945年から1995年ま

での50年の文学を研究対象にしたわけである。

李先瑞は私の弟子である。大学院生の時代からすでに日本文学に濃厚な興味を持つようになり、在学中に立派な論文を発表したそうである。10年の教師経歴を経て、2002年に博士一期生として上海外国語大学に入学し、3年で順調に卒業し、博士号を取った。2006年に39歳で教授に昇進し、今まではもう論文70篇を発表し、著作3部を出版した。2016年、李先瑞は洛陽外国語学院から紹興市にある浙江越秀外国語学院に転属し、学科のリーダーとして研究の意欲がいっそう募り、これまで研究した日本の現代文学の関連内容を整理・加工し、またこれまで研究しなかったものを付け加えてこの一冊のまとまったものにしたのである。間違いや不足なところは免れかねるが、推薦したい。簡単なが、以上を以って序文とする。

中国日本文学研究会会長

上海翻訳家協会会長

譚晶華

2017年10月

前言

在日本文学史上,现代文学的创作数量之多,非之前任何一个时代的文学可比,而且日本现代文学的创作风格各异,精彩纷呈,出现了众多文学大家,像川端康成、安部公房、三岛由纪夫、大江健三郎、津岛佑子、村上春树、吉本芭娜娜等人皆是享誉全球的著名作家,川端康成和大江健三郎更是获得了世界文学的最高奖——诺贝尔文学奖,足见其现代文学在日本文学史上的重要性。

在日本现代文学中,始于1945年的战后文学是现代文学中最重要的阶段。虽说现代文学始于1926年的昭和元年,但在军国主义政府加强了文化统制之后,日本文坛进入创作的寒冬期,为侵略者唱赞歌的御用文学占据主流,许多文坛大家有的转向,有的辍笔,有的写历史小说进行消极抵抗。所以,1926年到1945年的现代文学虽然也有好作品,但毕竟时间短,作品数量较少,不成规模。1945年,随着日本的战败,战前受到压制的作家们,其创作激情如决堤之洪水,一发不可收。战后初期的日本文学,其核心主题是反战,最先活跃的是民主主义文学,他们中的大部分作家属于战前无产阶级文学阵营,战后通过新成立的“新日本文学会”展开创作,涌现了《播州平野》、《二十四只眼睛》等反战名作。与民主主义文学几乎同时或稍后展开创作的第一次、第二次“战后派”也出现了像《真空地带》、《脸上的红月亮》、《樱岛》、《俘虏记》、《野火》等脍炙人口的反战作品。他们运用存在主义的创作手法,探讨了人在极限状态下的生存方式。与民主主义文学和第一次“战后派”同时期展开创作的还有战前的大家和以太宰治为首的文学流派——无赖派。无赖派以反传统秩序为特点,他们对既成的道德观念嗤之以鼻,自称甘愿堕落的人,无赖派另一位代表人物坂口安吾还写了评论《堕落论》,为自己的流派做理论代言人。20世纪50年代,在第一次“战后派”和第二次“战后派”之后出现了“第三新人”文学,其特点是,该流派作家大都获得过芥川奖,而且他们的创作倾向与第一次、第二次“战后派”不同,恢复了“私小说”的文学传统。“第三新人”之后的“内向的一代”是日本近现代文学的最后一个流派,其后的日本文坛虽然没有了文学流派,但文坛活跃度更高,出现了大江健三郎、开高健、井上靖等文学大家。尤其值得一提的是,战后女性文学以迅猛之势得到发展。其中不仅包括战前就活跃的平林泰子、佐多稻子、宫本百合子、壶井荣、野上弥生子、大田洋子、宇野千代、圆地文子,还包括战后才开始活跃的曾野绫

子、有吉佐和子、仓桥由美子、河野多惠子、山崎丰子等人。这些各具特色的女性作家十分活跃,人们称之为平安时期之后的又一个才女时代。20世纪60、70年代及其后的日本文坛男女作家各领风骚,个性化写作愈加突出,他(她)们为活跃日本文坛做出了各自的贡献。

本书选取1945年至1995年这五十年的文学为研究对象,对这一期间的代表作家和代表作品进行研究。为何选取这50年作为研究对象,笔者是这样考虑的。始于明治维新的日本近现代文学距今已有150年的历史,日本的文学评论家和文学研究者已经对日本近代文学的作家和作品进行了很细致的研究,研究涉及面广,有些论断已成为定论。中国学者根据这些论说,参考其他文献,可以较简单地进行研究。但是,日本现代文学的研究,尤其是战后文学的研究,由于参考资料少,研究起来相对费力。在中国国内,研究日本现代文学的论文为数众多,但综合研究的著述较少。因此,国内文学研究界急需对日本现代文学进行综合研究的专著。笔者着眼于以下几点对日本现代文学进行了一些研究。一是按照时代发展脉络选取作家和作品;二是选取各时期的代表作家的代表作品作为研究对象,共选取了二十多位作家的近四十部作品;三是把战后的女性文学列为单独一章进行研究。

本书在撰写过程中参考了有关日本现代文学的日本和中国方面的许多著作和论文,在此对这些著作和论文的作者表示由衷的谢意。本书用日文写成,由于笔者的能力所限,难免在表达上出现错误或不清楚之处,敬请各位读者批评指正。

李先瑞 2017年10月于浙江越秀外国语学院(浙江绍兴)

目 次

第一章 戦後民主主義文学研究	1
第一節 戦後民主主義文学: 主な作家と作品	2
第二節 宮本百合子の文学世界	17
第二章 無頼派文学研究	30
第一節 無頼派文学の概観	30
第二節 太宰治とその晩期創作	37
第三節 坂口安吾論	46
第三章 戦後派文学研究	51
第一節 第一次「戦後派」の作家達	51
第二節 野間宏文学研究	61
第三節 第二次「戦後派」の作家達	74
第四章 「第三の新人」の文学研究	104
第一節 安岡章太郎の文学	104
第二節 吉行淳之介の『驟雨』について	110
第五章 高度成長期の文学研究	113
第一節 この時期の文学の特質	113
第二節 大江健三郎論	116
第三節 井上靖文学研究	126
第六章 現代女性文学研究	134
第一節 現代女性文学の概観	134
第二節 倉橋由美子と『パルタイ』	136
第三節 河野多恵子文学研究——『幼児狩り』を中心に	141

第四節	大庭みな子の『三匹の蟹』試論	148
第五節	津島佑子の早期作品における女性意識をめぐって	155
第六節	有吉佐和子の『紀の川』をめぐって	160
第七節	『キッチン』から見た吉本バナナ文学の特徴	165
第七章	村上春樹と村上龍の文学	170
第一節	村上春樹の『ノルウエーの森』試論	170
第二節	村上龍の『限りなく透明に近いブルー』をめぐって	175
付録		
	日本現代文学史年表(小説)(1945—1995)	180
参考文献		194
索引		199

第一章 戦後民主主義文学研究

1945年8月15日、日本が無条件に降伏し、第二次世界大戦が終結した。戦争の間、日本軍国主義が文化統制をやったので、数多くの作家は筆耕を止め、一部の作家がまだ作品を書いているにしても、それが軍国主義にサービスする御用文学の類に過ぎないのである。軍国主義を唱えない作品はたまにあっても極僅かで、そしてそれが大体现実の生活から遥かに切り放していることを描いたものであった。例えば太宰治は1935年ごろ既に文壇に登場し、活躍した作家だったが、軍国主義の高圧政治の元で彼はもう自分の思想と感情をそのまま文章に納入することが出来なかった。それで太宰は歴史小説という形を借りて自分の感動を示した。また昭和初頭にはプロレタリア文学運動が挫折に遭い、一時に高揚した全国的な革命の波が寸断され崩壊し、芸術、文学の運動もやむを得ず解体してしまったから、プロレタリア作家の多くは「転向」の傷と負い目を抱いたのである。非転向の文学者として宮本百合子はまず筆頭に上げられる。

1937年12月、宮本百合子は政府から執筆禁止とされた。のちに何度も逮捕されたにもかかわらず、百合子は困難な日本の現状と戦って自我の要求する所を生き抜き、プロレタリア作家としての政治主義を最も忠実に貫こうとした。日本敗戦後まもなく宮本百合子は蓄積したすべての精力と熱意をもって長編『播州平野』を書き上げた。宮本百合子はこの作品で日本戦後文学の幕を上げたのである。

敗戦後、明治以来の強固な一貫した支配力が空前の打撃を受け、日本は米国占領軍の管理の元に置かれることになった。戦争の間、人々特に正義の人の内心に潜められた人間性、平等、自由などというものはすべて奪い去られてしまった。だから、自由、民主、平等などをスローガンにした戦後民主主義文学の基盤は戦争下には勿論無かったのである。実は、戦後民主主義は天皇制体制を大幅に再編した占領軍によって直接に与えられたもので、いわゆる「配給された自由」にすぎなかった。しかし、戦争中にはすでに社会主義者だった宮本百合子、中野重治、蔵原惟人らは占領軍によって与えられた民主をいかに実質化させ、いかにその与えられた民主の枠を破り出していくかというような(いろいろ

な)問題に直面し、民主主義革命ということを当面の目標として掲げた。敗戦後、占領軍の力で治安維持法が廃止され、特高と検閲機構が解体したことはプロレタリア文学とその運動の再建を必至のことにしたから、1945年12月、新日本文学会^①が結成され、戦後民主文学は本格的に発足するようになった。その後、戦争下に長く捕われ、または酷く圧迫されていた旧プロレタリア文学系の人々が盛んに書くようになった。

新民主主義文学の主な作家としては佐多稲子、平林たい子、宮本百合子、壺井栄、中野重治などがあげられる。これらの作家は戦前にすでに創作を開始し、戦争中創作をやめざるを得ず、敗戦後になってまた本格的に創作を始めた作家である。

第一節 戦後民主主義文学：主な作家と作品

一、佐多稲子の『くれなゐ』と『私の東京地図』をめぐって

佐多稲子(1904—1998)は明治37(1904)年に長崎市八百屋町に生まれた。彼女は18歳の中学生と15歳の中学生との稚い恋愛の結果としてこの世に生を享けたのである。小学校入学の時若い母親を亡くしていた。稲子の苦闘の生涯はその時に既に約束されたといえるかもしれない。1915年、佐多稲子は父親と共に上京したが、この無計画な上京によって生活は窮乏のどん底に陥り、佐多稲子は小学五年生のまま学業を廃した。1924年、資本家の嫡男と結婚したが、夫が変質の性情の持ち主だから、一年足らずで離婚した。1926年、佐多稲子は青年文学者窪川鶴太郎と結婚した。1926年、夫の励ましによって『キャラメル工場から』を『プロレタリア芸術』誌上に発表した後、彼女は新しい女流作家として文壇に活躍するようになった。実は稲子の目指した文学の方向はもう反動政府に虐殺された小林多喜二の文学の道を進もうとするものであった。当時の代表作は『幹部女工の涙』『祈祷』『小幹部』『何を為すべきか』『恐怖』の五部作である。敗戦前に既に夫との間に摩擦のあった稲子はずいぶん1945年に夫と離婚した。戦後佐多稲子はまた『灰色の午後』(1959)、短編『虚偽』(1948)、『泡沫の記録』『夜の記憶』(1955)、長編『私の東京地図』(1946—1947)、『歯車』(1958)、『機械の中の青春』(1954)、『みどりの並木道』(1951—1952)、短編集『女の宿』など数多くの作品

① 新日本文学会：1945年日本敗戦後、戦争期間中発言権が抑えられた元プロレタリア文学運動の作家であつた蔵原惟人、中野重治、宮本百合子らは日本文学の発展を図り、アピールして出来た新しい文学団体である。1945年12月にその成立大会が行われた。

を書いた。これらの作品の内、戦前の作品『くれなゐ』と戦後の作品『私の東京地図』が代表的な作品だと言える。

戦前代表作——『くれなゐ』

『くれなゐ』は1936年『中央公論』に発表した中編小説である。1936年1月から5月にかけて『中央公論』に連載されたが、未完のまま残りの部分が1938年8月に「晩夏」と題して『中央公論』に発表された。中央公論社は両方を合わせて『くれなゐ』という一冊の単行本を出版した。かつて革命運動の中で活動を通じて助け合い、信頼しあってきた、文学を仕事とする夫婦が時代の悪化の中で権力による敗退を余儀なくされたということを描いている。夫が心易い環境を求めて喫茶店に働く若い女性と恋愛に陥り、妻はその恋愛を是認しながら本能的な嫉妬のため半狂乱の状態を呈するに至った。これらの矛盾の堆積で家庭が破壊の一手手前まで陥ってしまった経緯を扱ったのはこの作品である。

『くれなゐ』は佐多稲子の戦前代表作である。佐多稲子自身の生活をふまえて創作したものである。あらましは次のとおりである。1935年元旦の夜、作家である滝井岸子と柿村明子は明子の長男行一をつれて、岸子の実家の別荘のある国府津へ行く。明子の夫広介はプロレタリア文化運動に参加したため、起訴されて刑務所で二年近く不自由な生活を送っていた。その間に明子は家での自由さを味わい、家の中心を占めていた。帰る夫は家で主導権がないことに反抗し、夫婦の間に亀裂が生じた。まもなく明子も岸子もその夫たちと同じように警察に拘留された。家に帰った明子は家での仕事場所を失った。明子は思想面でも生活面でも夫との矛盾はますます深くなった。別居しようという方法で解決しようとしたが、お互いに未練があって別居は失敗に終わった。明子は作家としての自分、妻・母としての自分の間に矛盾があることに悩んでいた。『くれなゐ』は稲子の夫婦間の間でお互いに傷ついた状態を描いた作品であり、稲子の経歴に取材し、私小説風の作品である。

『くれなゐ』のテーマについて、中野重治は戦後の早い時期にこう読み取っている。「ひと組の男女が誠意を持って、社会的活動と家庭生活を統一してやって行こうとするかぎり、この日本ではこういう行きつ戻りつやは、当分は消えそうにもない。つまり、この作は、今のままの日本であるかぎり、当分は消えそうにもないそういう苦痛を小説にしたものである。特にそういう場合の女の苦痛を小説にしたものである。」^①つまり、中野重治は日本社会の立ち遅れに重点を置いている。それに対して、平野謙は作家活動と家庭主婦の両立の難しさに

① 中野重治、『くれなゐ』について[G]、東京：新潮文庫、1952年5月28日発行

重きを置いている。平野謙は『くれなゐ』のテーマについてこう解説している。「かつては日本共産党の旗のもとに身命をささげて悔いなかった一対の男女が、突然他動的にその旗をおろされ、それにかかわるべき旗をおのがじし掲げねばならぬという困難な時期に、些細な日常性に足をとられてたじろぐとは、なんと哀しい光景であることか。すくなくとも女性の場合、女房的なものと非女房的なものととの統一は予想以上の矛盾を孕むものだった。それを守勢の転向時代に、いかにして積極的に打開することができるか。これが『くれない』の問題である。」^①一言で言えば、『くれなゐ』のテーマは中野重治と平野謙の評論に集約されていると言えよう。

職業作家として結婚した明子は創作活動をするかたわら、家庭生活を営まなければならなかった。特にその時期に夫には別に好きな女が現れていたのも、明子の婚姻生活は危機状態に陥った。夫が刑務所にいた二年間は明子は一人暮らしをし、自由な生活に慣れた。二年間の留守中に、明子はほんとうに、独りで暮らす自由さを味わった。それは非常に悲しいことだろう。夫を愛していながら、独り暮らしの自由さを望んでいるという矛盾は、女の生活の何処かにひそんでいるのであろう。

『くれなゐ』で提起した問題は、つまり職業婦人として家庭を重要視すべきか自分の職業を重要視すべきかという問題である。この問題は今になってもまだ円満に解決されていない問題である。女性として、もし職業を重要視するならば、伝統的な考えに背くことになる。しかし、ヒロインの明子はプロレタリア作家である。小説を書くことは明子にとって重要である。明子は人の妻としての役割と、小説家の役割の間で苦しみ、離婚を考えるに至ったのである。私小説風の作品だから、明子の苦しみを佐多稲子の感想を見ればわかる。1935年10月、佐多稲子はかつて『婦人公論』で「怖しき矛盾」というエッセイを載せた。そのエッセイの内容には「私は自分の仕事に不満を持ち、それへの激しい欲望のためにと思いついた願いを盾にして、ふたりの生活を放棄する考えにしばしば囚われ始めた」^②とある。

『くれなゐ』は女性の結婚生活と職業との間にある矛盾をテーマとした。家事と仕事の両立が困難だということの原因は何であろうか。その原因は日本人の伝統的な性役割分業にあると思う。明治維新は市民運動ではなかったから、明治維新後も日本は濃厚な封建制を保ってきた。男は「外」女は「内」という因習観念は依然として社会の主流思想であった。女が結婚したら家で家事に専念しなければならないという社会通念は根強く残っている。こういう思考のもとで

① 平野謙、日本文学全集 佐多稲子集[M]、東京：集英社、1973:427。

② 佐多稲子、怖しき矛盾[G]、東京：婦人公論、1935年10月号

は、女が結婚したら、職業を放棄したほうがいい。たとえ職業を持っていたとしても、家事という分業は女ひとりで担わなければならない。そうすると、職業婦女は二重の苦勞を舐めなければならない。女性が男性の従属物だという封建的な思想は男性優位を守り、男性を中心にして生活を展開させるわけである。その結果、職業婦女は生活の面でも精神の面でも束縛されることになる。『くれなゐ』のヒロイン明子はこういう社会通念のもとで苦しい生活をしていた。しかし、明子は社会主義思想の持っている作家だから、創作は家事などの責任よりもっと重要だと思っている。それで、女中を雇い、子供を年取った祖母に任せるなど、家事の一部分をほかの人に引き受けてもらっている。しかし、明子の考えでは、家事や育児は一家の主婦のやるべきことである。したがって、明子はとにかく女中や自分の母に気兼ねをする。とくに、明子が夫の広介より先に作家になることで、明子は妻としての心遣いを大いにおわせた。つまり、明子はまだ封建的な家庭観念から脱していない。仕事と家事(夫への愛)が両立できない状態のままである。これは明子だけに限ることではない。同時代の多くの女性作家の直面しなければならないことである。佐多稲子はこの小説をもって非常に大きな社会問題を提起し、人々に深く考えさせられる。

『くれなゐ』は佐多稲子の作品の中で一番人々の印象に残る名作だと思う。なぜかというと、作品の感情描写には深さがあるからである。女主人公の深いうめきが聞こえて来るようである。このような深い感情は稲子のほかの作品には求められない。作中には受け身的な妻と典型的なエゴイスチックな夫のイメージが浮き彫りにされた。作者は妻の側から社会的活動と家庭生活とを誠意をもって統一しようとする新しく強い論理が抑制された文体によって正確的に表現された。しかし、これが若い時の作だけにほそぼい感じがあることは避けがたい。

後期代表作——『私の東京地図』

『私の東京地図』は1946年『人間』など各誌に分載された長編小説であり、「版画」「橋にかかる夢」「下町」「池之端今昔」「挽歌」「坂」「曲がり角」「表通り」「川」「移り行き」「表と裏」「道」などあわせて十二の作品から成る。具体的にいうと、雑誌『人間』に「版画」「下町」「池之端今昔」を、雑誌『展望』に「挽歌」を、雑誌『婦人文庫』に「坂」を、というように、およそ2年にわたって、いくつもの雑誌に次々発表していったのである。この時稲子は42歳であった。向島、上野、日本橋、神楽坂、三田、目黒、本郷と、移り住んでいったいくつもの東京の街を、そこにいたるまでの30年に及ぶ自分の歩みと重ねるように描き出した。最初から長編的構想で書き始められたものというより、各章が独立した短編の形を取り、

全体として一つの調子にまとめられている。小説は関東大震災と第二次世界大戦の戦災で昔の面影をまったく失った東京の風物を、主人公の生い立ちの苦難と陰りに満ちた時々と重ね合わせて心象風物詩的に或いは版画をめくるような情調をこめて書き綴ったものである。

『私の東京地図』は敗戦の翌年1946年に書かれた作品である。稲子は東京を歩き回りながら体で感じられていた昔のことを思い出す。敗戦後のころの東京はまだ焼け野原であった。作者は東京の焼け野原に立ちながら、作者がまだ娘だった大正時代の東京の情景を思い出す。小説は次のように書き始まった。

私の東京地図は、三十年の長きに亘って歩いてきた道の順に、心の紙に写されていったものだ。だから歳月とともに街の姿そのものが変わってゆき、私の心の地図は名所案内の版画のように古めかしい景色であったり、白と黒とに光沢を持たせた芸術写真といったような風景であったりする。

この移りゆく風景の中を私が歩いている。まだ肉のつかぬ細い足で、東西も知らず歩き出している。…

それらの東京の街は、あらかた焼け崩れた。焼けた東京の街に立って、私は私の地図を展げる。私の中に染み付いてしまった地図は、私自身の姿だ。^①

作品では、ヒロインは回想の形で作者が大正時代の東京のことを描いたのである。また、ヒロインは若い頃、大杉栄との出会ったことを回想した。ヒロインは自分の結婚、自殺未遂、出産、離婚、同棲といった人生を振り返った。そして、作家活動や非合法活動で当局に弾圧を受け始めた太平洋戦争へと突入する時代を回想し、上野、日本橋、神楽坂など、親しんだ東京の街々を思い出した。ヒロインの半生の経過を描いていて、『私の東京地図』には生き生きとした人々の息吹が感じられる。作品では東京が佐多稲子の心象風景として鮮やかに描かれる。ヒロインは自らの過去を探り、自らを確認するような筆致が読者の心に響く。

敗戦後、日本のほとんどの人が過去から切り離され、新しい日本に目を向けようとしていたとき、稲子はひとり古い東京を自分のうちに呼び戻し、地図の中に自分を立たせた。苦しみながら書かれたものだが、『私の東京地図』は感傷も悔悟も見られない。『私の東京地図』について、作家の堀江敏幸はこう書評している。「歩いている人にしか見えてこない光景がある。ただし、何もしなければ漫然と流れていくだけの眺めを、日々の暮らしのなかで深く身体に染み込

① 佐多稲子。私の東京地図[M]。東京：筑摩書房、1959:4。

ませることのできる人とそうでない人がいて、たとえば佐多稲子はまちがいなく前者に属していた。」^①このように、若い頃のことは佐多稲子にとって忘れられないことであり、特に美人としての稲子は家庭内のこととナッパ組織内のことで心身疲れ、さんざん悩んだことがあったから、過去のことはなかなか忘れられないのも無理はないであろう。

小説はまた日本政府が朝鮮人への加害を描いた。このことは歴史上本当に起こったことであった。「…井戸へ朝鮮人が毒を入れたと噂が飛ぶ。一晚中朝鮮人に追いかけて逃げたという人がある。すると同じ長屋の男まさりのおかみさんが、く何言っているんだよ。朝鮮人が追っかけられたのさ。その前をまた逃げたんだよ。日本人のほうはどうしたって数が多いじゃないか。こわがることはないよ」と言った。私は、そのおかみさんの判断に感服した」^②。本当のことはどうかというと、震災のとき朝鮮人が井戸に毒を入れたというのは、もちろん嘘である。ところが、そのデマが意図的に流され、デマに踊らされた日本人は、少なからぬ朝鮮人を虐殺してしまった。これは震災がもたらしたパニックで、他者(日本人ではない者)に対してわけわからず恐怖の目が向けられた中で引き起こされた惨劇である。

『私の東京地図』では、ヒロインの革命生涯を描いたし、その家族のことも描いた。特に佐多稲子の叔父佐田秀実の一家の生活と叔父の死亡について細かく描いた。佐多稲子が東京に来たとき、家を見つけてくれたのは佐田秀実である。佐多が父方の伯母の嫁ぎ先へ養子に入ったため、姓が違うが稲子の父の実弟である。叔父一家が上京してまもなく、叔父は栄養失調から心臓脚気になり、小梅町の長屋で寝付いてしまった。

叔父が病気で死を迎えることを知り、ヒロイン(稲子)は次の朝掃除をすまして向島の家へ帰るとき、吾妻橋の上を駆けて通った。格子を開けて入ると、もう家の中はひっそりしていて、叔父の寝床は布団の裾がととのえられている。叔父はもう息を引きとってしまっていた。この叔父が死んだとき、奉公人の稲子は急いで帰ることができないのは稲子にとって非常に残念に思うことである。

『私の東京地図』は戦後の作品ではあるが、作者の佐多稲子は自分の戦争中の戦争協力のことを意識的に避けたから、そこには佐多の弱さが露呈し、批判されたりもした。戦争中の戦争協力が原因で、1945年の暮れ、プロレタリア文学の作家たちが新日本文学会を創立したとき、稲子は発起人になれなかった。戦地慰問など戦中の行為が問題とされたもので、発起人の一人として稲子の名前

① 美しい人 佐多稲子の昭和[M]. <http://www.gei-shin.co.jp/community/22/4.html>

② 佐多稲子、私の東京地図[M]. 東京：筑摩書房、1959:59.

をあげたのは中野重治であったが、稲子の友人である宮本百合子に批判され、しりぞけられた。その決定を自宅まで稲子に伝えにきたのも中野重治である。佐多稲子がこの決定に抗したい気持ちがあった。佐多稲子自身の考えでは、戦争に協力するつもりはなかった。文章を書く人間として、この目で戦地を見たかっただけである。このとき発起人に加わった顔ぶれのなかには戦争協力的な文章を書いていた人間がいる。稲子が戦地に赴くとき、百合子も含めた仲間たちはその行為を了解していたはずという思いもあった。元夫の窪川鶴次郎の名前も発起人の中にはあった。しかし、それが原因で稲子自分に責任がないとは言えない。作家として、あのときは仕方なかった、ではすまされない。戦地へ出かけて文章を書いたのはやはり間違いで、そうさせたのには自分の弱さもあったからではないか。

中野重治は佐多稲子の戦争協力を知っていながら、依然として佐多稲子の新日本文学会の発起人にしようと思っているのはなぜか。その原因は佐多稲子と中野重治の関係が格別にいいからであろう。佐多稲子にとって中野重治は知遇の恩人だけでなく、恋人以上の親しい存在である。佐多はカフェの女給をしていたとき、中野に小説を書くよう勧められ、『キャラメル工場から』を書いて作家としてデビューした。佐多は中野の仲間の窪川鶴次郎と結婚し、佐多と窪川は中野に女優の原泉を世話している。佐多は中野たちの影響で当時の共産党に入党し、戦前の地下活動にも関係している。佐多稲子は窪川とは早くに別れたが、政治運動や作家活動を通して中野とは生涯親しく交わっていた。戦後は一緒に共産党から除名されている。二人の間には強い好意を抱いていることはいうまでもない。二人とも相手がどんなに大事な存在かよく知っていたに違いない。自分にとってどんなにかけがいのない存在であることかをよく知っている。しかし、それは認めてはいけなかったらしい。

前に触れたように、宮本百合子は佐多稲子の新日本文学会の入会に反対したのである。現実生活において、二人の関係は悪くない。佐多稲子は『私の東京地図』でも宮本百合子について描写したことがある。たとえば「挽歌」の章には、若き日の宮本百合子をとらえた文章もある。丸善の女店員時代、麻のパンカチやフランスの香水など贅沢な外国製品を求めに訪れる常連客を描くなか、その一節は続く。「『伸子』の作者を最初に見たのもここであった。一人の人間のものの言い方や態度の系統というものは、おそろしいほど、年月を経ても変わらないものだ。」^①というふうに宮本百合子を描いている。

『私の東京地図』は回想の形を取っただけに、内容的には整っていないという足りないところがある。作者は自分の戦争協力にも触れていなかった。しかし

① 「美しい人 佐多稲子の昭和」、<http://www.gei-shin.co.jp/comunity/22/4.html>